

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Rakugo : a discourse analysis of Japanese traditional comic storytelling

メタデータ	言語: eng 出版者: 公開日: 2012-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Kitagawa, Chiho メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1000

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



2. 博士論文審査の要旨

本論文は、落語を演者が時間の流れのなかで繰り広げる出来事としてとらえ、そのジャンルの特徴の記述・説明を行う談話分析研究である。これまでの落語に関する言語学的研究は筆記されたテキストを「もの」として静的にとらえ、オチの分類やおもしろさの理由を求めることに関心を置くものが多かった。そこでは落語のディスコースの特徴をじゅうぶんにはとらえ切れていない。本論文はこの点で先行研究と性格を大きく異にする。

対話的な「枕」と3人称的な語りである「噺」（本題）との言語行為上の違いや、二人の登場人物の対話を一人の登場人物の独話として語る「独話的対話」など、これまで看過されてきた落語独特のディスコースの特徴が記述されている。しかもその特徴を、一人の演者が最小の道具で登場人物を演じ分けるという落語特有の制約に起因することを指摘する。つまり、現象の記述においても、その説明においても、本研究は談話分析研究に大きく貢献する。

もっとも修正すべき点もある。本論文は「語り」と「対話」のモードを対立的に使用するが、この2項対立は、その主張内容からすると「口頭言語」と「3人称の語り（フィクション言語）」に訂正すべきだ。このような修正点はあるものの、本論文が持つ学問的意義は否定できない。

以上の理由から、本審査委員会は本論文に以下の評価を与え、課程博士論文として認定を可とすることで意見が一致した。

論文審査結果

本論文は、落語のディスコースに関する談話分析的研究である。落語のことばに特有の特徴を記述したうえで、なぜそのような特徴をもちえるのか説明を行っている。構成は以下の通り。

1. Introduction
2. Previous studies
3. The dialogic and narrative modes in rakugo
4. Personae
5. Monologic dialogue
6. Scene changes
7. Quotation, flashback, story within a story
8. Conclusion

全体の目標を設定する1章のあと、2章は先行研究のレビューを行う。これまでの落語に関する言語学的研究は、筆記されたテキストを「もの」として静的にとらえ、オチの分類やおもしろさの理由を求めることに関心を置くものが多かった。それらによって落語のディスコースの特徴がじゅうぶんにとらえきれたとは言えない。これに対し、本論文の眼目は、落語を演者が時間の流れのなかで繰り広げる出来事として動的にとらえ、そのジャンルの特徴の記述・説明を行うことにある。その意味において、本論文は落語のディスコースに対して談話分析が行うはじめての実質的貢献と言えるだろう。

3章と4章は、落語のことばの特徴を演者（話し手）と観客（聞き手）との関係においてとらえる。落語は、枕と本題（噺）とに分けられるが、両者は異なった言語的特徴を示すことを3章は指摘する。枕では、演者の登場・挨拶にはじまり、本題へとつなぐための小咄がしばしば提示される。そこでは、フィラーなどの言いよどみや、1人称代名詞に代表される演者自身に対する言及、そして観客に対する語りかけを表す終助詞などが頻繁に観察される。他方、落語の本体をなす本題では、そのような言語的特徴は原則として見られない。つまり、枕は話し手と聞き手を明確に指向する言語特徴にあふれているが、本題はそのかぎりではない。

この両者の違いは、先行研究では指摘されることがなかったものの、落語のディスコースにまつわるさまざまな不思議を解くための基礎的で重要な発見である。本論文は、この両者の違いを「対話」(dialogue)と「語り」(narrative)という情報やりとりのモードの違いに求める。もっとも、枕と本題の違いを対話と語りの対立においてとらえられるのには問題がある。たしかに枕には対話的特徴が色濃く現れるが、ここで指摘される対話的特徴（話し手と聞き手を指向する表現群の存在）は、口頭の語りにも見られるからだ。むしろ、対面的コミュニケーションと非対面的コミュニケーション、口頭言語とフィクション言語、体験談的な1人称の語りと虚構的3人称（非人称）の語りといった2項対立によってとらえるのが（現象を説明するのにぴったりの対立項目をひとつに絞りきれず、複数挙げざるをえないところに、問題の難しさが窺えるかと思う）、より正確であるだろう。このように、著者の事実観察は的確であるが、その解釈には異論の余地がある。しかし、このような異論は本論文が持つ事実観察の重要性と記述的価値を損なうものではない。これまでに看過されてきた重要な言語的特徴が明るみに出され、その事実が落語というユニークなディスコースの性格をとらえる足がかりとなっていることには、何ら変わりはない。

好意的にとらえるなら、本論文にはさらに大きな発展の余地が残されていると言える。

というのも、この問題にさらに踏み込むことで、フィクション言語の性格づけに新たなヒントが与えられると考えるからだ。本論文がとらえる枕と本題の言語的相違は、これまでの談話研究の主流の考えからすれば、口頭言語と書記言語の違いに帰せられるのではないかと思う。

しかし、落語はつとめて口頭の芸能である。話しことばと書きことばの対立以外の視点が必要になっていることを、フィクション言語と語りというコンテキスト（情報提示形式）の関係を解く鍵を、本論文の発見は示唆している。

4章は、3章の発見を受けて、落語における話者の概念を整理する。すなわち、演者である落語家自身をストーリーテラー(storyteller)、本題の地の部分を語り手(narrator)、そして、本題に現れる登場人物(character)の3種類に分類し、これらがどのような関係にあるのかを整理する。この3種類の人物像を演者ひとりですべて現出せしめるのが、落語特有の特徴である。

5章以降は、落語のディスコースに見られる特有の特徴(独話的対話、場面転換、引用の入れ子構造)をさらにあぶり出し、その特徴を落語に通底するミニマリズムによって説明する。そのそれぞれが、落語のジャンルの特徴を記述し、理解するのに貢献している。

5章の独話的対話(monologic dialogue)を例に取り上げよう。独話的対話という矛盾をはらんだ命名は、落語に特有のユニークな言語現象をとらえるのにまさにふさわしい。独話的対話とは著者による造語であり、以下のような発話(とくに下線部)のことを言う。

鳥屋：そら、あんた、えらいこってんがな。え?どないしてもみかんを見つけられないかん?
は、さよか。それやったらね。この辺でうろうろしてたんではあきませんわ。

(林家染丸、「千両みかん」)

ふたりの登場人物(鳥屋と番頭)が対話を行っているのに、演者は一方(鳥屋)のことばしか提示しない。つまり、独話的対話とは、2者間の対話が独話の形式で伝えられる現象を指す。

造語が必要になったことから分かるように、本論文ではじめて記述された現象である。

独話的対話は、本来なら不自然な言語現象である。しかし、落語という環境のなかではきわめて自然な情報提示になっている。本論文はその不思議を巨視的コミュニケーション(macrocsmic communication)の優先と情報提示のエコノミー(ミニマリズム)という観点から説明する。フィクション的小世界(microcosm)における登場人物間のやり取りを微視的コミュニケーション(microcosmic communication)、演者から観客への情報提示を巨視的コミュニケーションと位置づけると、独話的対話は、すでに事情を知っている観客にとってあからさまな繰り返しにならないように、登場人物間の対話を独話のかたちにして効率的に提示したものである。観客にとっては情報提示が効率的に行われているだけに自然に聞こえる、という訳だ。しかも、この独話的対話は、効率的な情報定時に貢献するだけではない。ひとたび落語的な話法として定着すると、今度はこの特徴的な提示方法を利用して、アイロニーや笑いの効果を生み出すべく生産的に用いられている。本論文はそのような表現効果をも記述している。

このように本論文では、落語に特有の個性的な情報提示やことば遣いがまず記述され、そしてその表現効果や成立動機が解説される。ことに、落語の個性的な言語特徴が、一人の演者が最小の道具で登場人物を演じ分けるという落語特有の制約(これもまた、著者の言うミニマリズムのひとつの現れである)に起因すると論じる姿勢は、非常に説得的である。落語のデ

ィスコースに対する談話分析研究として、本論文は現象の記述においても、その説明においても高く評価できる。

最後に、著者の研究姿勢について述べたい。ひとつのジャンルの記述するにあたって、本論文が上述の成果を収められた背景には、著者のデータに対する深い沈潜がある。実際、著者の精力的なデータ収集とデータに対する理解の深さには、敬服すべきものがある。談話研究者として落語のディスコースに対峙することはもとより、落語に深く身を投じることによって、本論文の観察ははじめて可能になったものと推察する。桂かい枝の英語落語翻訳に携わる、桂三枝のアメリカ公演にスタッフとして参加する、英語落語を導入した英語教育法を考案する、さらには、プロの噺家から落語の稽古をつけてもらうなど、著者が落語と向き合う姿勢を伝える事実は数多い。談話分析研究の基本は、データにどれだけ沈潜するかにある。

その点において著者北川千穂に並ぶものはそう多くないだろう。

以上、本論文の概要を示しつつ、評価を述べた。上記の点から、本委員会は課程博士の学位を著者に与えることを可と判断した。

最終試験結果

[2012年2月24日試験実施]

最終試験は3名の学内審査委員（山口治彦（主査）、本多啓、那須紀夫）と1名の学外審査委員（平賀正子立教大学教授）の4名により公開審査の形式で本学の三木記念会館で行われた。

はじめに、著者が落語公演のDVD録画の提示を交えつつ、オーラルプレゼンテーションを行なった。引き続き、審査委員と著者とのあいだで質疑応答が行なわれた。質疑応答で提示された意見のいくつかは、本論文の概要を説明する過程ですでに述べたが、ほかにも今後の研究の発展を促す貴重な意見があった。著者による回答も誠実かつ丁寧なもので、内容も的確であった。

また、フロアからも活発に質問や意見が述べられた。特に、本論文の英文校正にかかわった落語家桂三輝（サンシャイン）氏からは、落語家の実践に基づく意見が開陳された。落語という日本の伝統芸能にたいする学問的考究に実践の華が添えられるかたちになり、より意義深いものになったように思う。

本論文は、これまで看過されてきた落語の言語特徴を記述し、その個性的な特徴に必然的な原因があることを説く。その説明にはさらに発展の余地があるが、現時点でもじゅうぶんな説得力を有しており、その功績は高く評価できる。